

規律と規則

日大アメフト問題



欧米由来の近代スポーツには英国型と米国型があるという。前者はジェントルマンシップを育てる教育の一環として作り出されたサッカーやラグビーなど

である。英国型の特徴は簡明なルールの下で、プレーヤーが自らフェアなプレーに徹する自己規律を求める。英国発祥のゴルフがプレーヤーの判断と自己申

告を求めることにも通底する。米国型は細かなルールがあり、その定め範囲で戦略的チームプレーが追求される。

商業化の流れのなかでこの差違は小さくなっているが、選手の間が自由に行われる米国型と制限が強く残るサッカーなどに痕跡が残っている。

なぜこのような違いが生まれたのかについて諸説あるが、英国型は自立的な個人の自己規律を育む紳士の教育に由来する。

これに対して、多様な文化的背景を持つ移民社会であった米国では、共通の基盤を欠くために厳格で詳細なルールによってはじめてフェアな競技条件が作られたと考えられている。

個人の自己規律も守るべきルールも、近代的な民主主義社

会に不可欠の前提条件である。近代スポーツは、この前提条件を学びとる重要な機会を提供するものであった。

チームの戦略だとしても、ルールを無視したラフプレーをすることは、英国型に即して考えれば、選手個人の判断で避けるべきことであった。そのプレーに弁解の余地はなく、責任を自覚して謝罪したことは、規律ある自立した個人としては当然の対処であった。

他方で、米国型の競技では戦略的な選手の入替えや戦略を指示する監督やコーチの権限が強い。選手は戦略に従った役割を分担する駒に過ぎず、チームの規律を逸脱することは許されない。

従って、権限をもつ人々がルールを無視するような指示を出したとすれば、彼らはスポーツの世界にとどまる資格はない。それにもかかわらず、今回の日大アメフト問題では、監督もコー

チも試合中の選手の行動については、指示を誤解した選手の逸脱に過ぎないと責任逃れに終始し、選手を切り捨てようとする。

こんなことが容認されるようだと、近代スポーツが範を示してきた自己規律と規則に従う市民社会の基本的な前提すら日本社会には定着していない、と疑われかねない。

もっとも、首相の意向を忖度してその意図に沿った政策を実現することが常態化している政治状況に鑑みると、民主主義の守るべき原則は忘れ去られているというべきだろう。政治主導のチームプレーを追求する内閣の在り方が、政策官庁の自律性を阻害し自覚すべき責任を放棄させている。

責任を痛感して謝罪し、取材に応じた20歳の青年の姿と、ポーズだけの「誠実な説明」で責任逃れをする安倍晋三首相の姿の対照は際立っている。

(東京大名教授 武田 晴人)

アメリカンフットボールの反則問題を巡り、記者会見で謝罪する日本大の選手=5月22日、東京

